

## 研究ノート

## ダブル・コンティンジェンシーについて

春日 淳 一

## 要 約

自分がどう出るかは相手の出方次第であり、相手から見ても同様であるとき、ダブル・コンティンジェントな状況にあるといわれる。コンティンジェンシー（不確定性）は事態をむずかしくする厄介者のようであり、除去すべきものと考えられがちである。パーソンズもその方向でダブル・コンティンジェンシーの問題をとらえた結果、満足な解決に至らず終わった。一方ルーマンは、ダブル・コンティンジェンシーがあるからこそ相互行為や社会システムが生まれるのだと見る。この魅力的な発想転換を、彼のいう「コンティンジェンシー概念の拡張」を手がかりにして読み解き、筆者なりにくわいて説明するのが本稿の主旨である。コンティンジェントなものは、必然的でもなければ、不可能でもないものである。その「不可能でない」に賭ける人間がいるかぎり、社会システムは生成するのである。

キーワード：コンティンジェンシー；ダブル・コンティンジェンシー；相互行為；社会システム；必然性の排除；不可能性の排除；ブラック・ボックス；沈黙交易  
 経済学文献季報分類番号：01-13；02-13

## I. はじめに

相互行為の成立さらには社会システムないし社会秩序の生成をめぐる議論で核心的位置を占めるダブル・コンティンジェンシー（二重の不確定性）の問題は、パーソンズによって明示的に取り上げられ、のちにルーマンによってより徹底的に考察された。そのさい、パーソンズがいわば問題をずらしただけに終わったことは多くの研究者の指摘するところだが、ルーマンは問題をどう処理したのであろうか。彼は問題の本質にまでさかのぼってその意味を明らかにしたらしい、という程度の漠然としたイメージはあっても、ルーマンが問題に答を出したのかどうか、出したとすればどんな答だったのかと問われると、はなはだ覚束ない。ルーマン理論の解説書を見てもそのあたりを必ずしも明確に述べてくれているわけではない。筆者はこれまで経済システムやそのメディアである貨幣に焦点を合わせてルーマンを論じてきたが、ふとしたきっかけで「ルーマンについてあれこれ言説を振りまいているのに、こんな基本的なところでなんというあやふやな理解しかしていないのか」と思い知らされる場面に

遭遇した。そこで反省を込めつつルーマンの原典に立ち戻ってもういちどじっくりこの問題と対峙してみようと考えた。以下はその顛末を記すものである。なお、ルーマンの記述はもとより、解説書も多くは難解でしばしば立ち往生ないしギブ・アップせざるをえなかったという経験に照らして、できるかぎり平易な表現で書き進めることにする。

## II. ダブル・コンティンジェンシーとはどんな状況なのか

そもそもダブル・コンティンジェンシーとはどんな状況を指すのであろうか。この言葉がかなり浸透しているはずの社会学においても、辞典類に独立の項目として取り上げられているケースは多くないし、ましてや経済学の用語集・辞典類に「ダブル・コンティンジェンシー」という項目を見かけることはない。しかし、ダブル・コンティンジェンシーは経済学でも夙に問題にされてきたのである。すなわち物々交換のさいの「欲望の二重の一致」という話である。アダム・スミスの『諸国民の富』第1編第4章「貨幣の起源および使用について」の冒頭の部分はその代表的な例であろう。すなわち、「肉屋は、その店に自分が消費するよりも多くの肉をもっており、しかも酒屋とパン屋のおのおのは、その肉の一部分を購買したいと思っている。ところが、かれらはそれぞれの職業の異なる生産物以外には、交換に供すべき一物もなく、しかも肉屋は、自分がいますぐ必要とするくらいのパンやビールはすでにその全部をととのえているのである。このばあい、かれらのあいだにはどのような交換もおこなえないであろう」([9] 訳(一) 134頁)。もし貨幣なしに交換が起こりうるとすれば、肉屋がパンを欲しがっており、パン屋も肉を欲しがっているという状況で二人が出会ったばあいに限られる。たまたま肉屋とパン屋が出会ったとしても、その時点で互いに相手の持ち物を欲しがっているかどうかは、偶然がふたつ重なるかどうかということであり、可能性は小さくならざるをえない。この「偶然がふたつ重なるかどうかということ」がここでいう「ダブル・コンティンジェンシー」なのである。

アダム・スミスの例は、ダブル・コンティンジェンシー問題が経済学と無縁ではないことを示すために持ち出したのだが、ダブル・コンティンジェンシーとは何かを明瞭なかたちで教えてくれるとは言いがたい。そうであれば、まずはパーソンズの原典にこの言葉の説明を求めるべきであろう。ところが彼の『社会体系論』では周知の用語といった扱いで、あらたまった説明は与えられておらず、そのためか邦訳にはわざわざ訳注がつけられている([8] 訳54頁および77頁)。幸いルーマンが『社会システム理論』でパーソンズに代わって簡潔に表現してくれているので、それに拠ることにしよう。すなわち、パーソンズのとらえたダブル・コンティンジェンシーの問題とは「どのように自分自身が行為するのか、およびどのように自分自身がその行為を相手の人に接続しようとしているのかに、相手の人がその行為を

依存させており、その立場を変えて相手からみても同様であるのなら、相手の人の行為も自分自身の行為もおこりえないということ」([6] S.149; 訳158-9頁)である。

行為を交換行為に限定して、たまたま出会った肉屋とパン屋のケースにあてはめれば、たしかにダブル・コンティンジェントな状況が現出する。しかし肉屋とパン屋がかりに顔見知りであったとすれば、互いに自分の意志ないし希望を伝えたいとてうまく折り合うことができれば交換が実現するし、さもなければ「それは残念。またの機会に」となるだけのことで、両者は潜在的には交換のパートナーであり続ける。問題はそれほど深刻ではないのである。パーソンズやルーマンが問題にするのは、会話を含めてそもそも両者の間に何の相互行為も起こらない状況である。これこそが社会学上のダブル・コンティンジェンシー問題なのである。それゆえ、経済学に引きつけて言えばアダム・スミスの肉屋とパン屋の例ではなく、ヘロドトスの伝えるカルタゴのフェニキア人と古代リビア人の間の「沈黙交易」のほうが問題の核心にふれる例となる。沈黙交易については本稿の最後にとりあげたい(くわしくは栗本[5]の第6章「沈黙交易」を参照)。

### III. パーソンズの問題処理とそれに対する批判

パーソンズがダブル・コンティンジェンシー問題をどう処理したかについては、社会学者のあいだではほぼ見解の一致をみているようである。ふたたびルーマンの言葉を借りると、「パーソンズは、人びとが想定した(しかも人びとにじっさいに十分に受け入れられた)価値コンセンサス、人びとが一様にいっている規範的指向、つまりは“コード”のような規範的性格を有している“分有されたシンボル・システム”によって、ダブル・コンティンジェンシーの問題が解決されると考えている」([6] S.149-150; 訳159-160頁)のである。なるほど「価値コンセンサス」なり「分有されたシンボル・システム」なりが相互行為の発生を容易ならしめることは想像できる。しかし、「ダブル・コンティンジェンシーのなかから、共有されたシンボルのもとでのコミュニケーションが可能な状態がいかんして生じてくるかこそが、説明されねばならない」(馬場[1] 67頁)のであって、「価値コンセンサス」や「分有されたシンボル・システム」それ自体が相互行為を起動させるとは考えにくい。

ルーマンの目から見ればパーソンズは旧来の考え方から抜け出せない中途半端な位置にとどまっている。「ダブル・コンティンジェンシーの問題の解決を、もっぱらすでにそこに見いだされるコンセンサスのなかに、それゆえにもっぱら社会的次元のなかに探し求めることは、けっして強制されてはいない」([6] S.150; 訳160頁)のだから、視野の拡大・視点の切り替えを通してほかの可能性を探ってみるべきなのだ。ルーマン自身の記述は入り組んでいて分かりにくいのが、誤読の危険をかえりみず筆者の言葉に直すと以下になるろう。す

なわち、「パーソンズも他の多くの研究者も、ダブル・コンティンジェンシーを相互行為ひいては社会システムの生成を妨げるいわば厄介者(=解決されるべき問題)ととらえているが、逆にダブル・コンティンジェンシーがあるからこそ、相互行為が起動し、社会システムが生成されるのだ」。このような読み方ができることは、「ダブル・コンティンジェンシーの問題は、まさしく偶然を吸引しているのであり、偶然に対して敏感に反応している。たとえ価値コンセンサスがないとしても、それは創り出されるであろう。神が何も与えないとしても、システムは生じるのである」([6] S.151; 訳161頁)とか、「ダブル・コンティンジェンシーによって、…特別の行為システム、すなわち社会システムの分出が可能になる」([6] S.153; 訳163頁)といった表現から推し測れる。こうしたいわば「逆転の発想」はルーマンの得意とするところで、馬場靖雄氏もそのあたりを強調しつつ、ルーマンのダブル・コンティンジェンシー問題への対応を論じている([1] 66-83頁)。とはいえ、いきなり逆転を求められた方にしてみれば、捻挫を起こして議論についていけなくなるおそれなしとしない。筆者はできるだけ柔らかく解きほぐして説明したいと思う。

#### IV. ルーマンの<sup>フレイクスルー</sup>問題突破

##### IV-1 コンティンジェンシー概念の拡張

手がかりはルーマンの抽象的な記述のなかに紛れている稀少な具体的描写にある。すなわち、「他者は、まだ不明確な状況のなかで、はじめはみずからの行動を試行的に決定する。彼は、親しみを込めたまなざしを送りはじめたり、なんらかの身振りを開始したり、プレゼントを差し出したりする。ついで他者は自分の提示した状況規定を相手である自己が受け入れるのかどうか、どのように受け入れるのかを、じっと見守っている。その次におこなわれる自他の行動はことごとく、他者の最初の行動からみれば、そのコンティンジェンシーを縮減し、それを規定する——ポジティブなものであれ、ネガティブなものであれ——効果を有している行為なのである」([6] S.150; 訳160-161頁。訳文は目下の文脈に即して一部変えてある)。この具体的状況と、少しあとに出てくる「コンティンジェンシー概念は、必然性の排除と不可能性の排除にほかならない…。コンティンジェントなものは、必然的でもなければ、不可能でもないものである」([6] S.152; 訳163頁)という記述(ルーマンはこれを「コンティンジェンシー概念の拡張」と呼んでいる)を結びつけると問題の核心が見えてくる。

まず後者の「コンティンジェンシー概念の拡張」からみていこう。筆者自身の体験を例に言うなら、私は「ルーマン理論にはまり込んでしまった」という自らの現にある様相(姿)をコンティンジェントな事態と見ているのであるが、その意味は、現状に至るまでのさまざ

まな場面で「事態が別様に展開する可能性があった」にもかかわらず、そうしたもろもろの可能性はどういうわけか現実化せず、結果的にたまたま今あるような姿になった、ということである。1978年春にM書店の洋書棚に『社会学的啓蒙第2巻』が並んでいなかったら、1984年秋に恩師を訪問したとき、彼が自分と同じ留学先を強力に勧めてくれていたら、おなじころ同僚が、ルーマンをやっているなら当然、彼のところに留学すべきだと（筆者にそんな勇氣はないだろうとひやかし半分に？）助言してくれていなかったらなどなど、思いつくだけでもいくつかの可能性の分岐点が浮かび上がる。上記の引用部分に続けてルーマンは「ことがらが現にある（過去にあった、今後あるであろう）あり方は、そのようにあることが可能であるのみならず、またそれとは別様にあることも可能なのである。…コンティンジェンシーの概念は、現に存している世界を前提としているのであり、したがって可能なもの一般ではなく、この現に存している世界というリアリティからみて、別様にありうるものを言い表している」（〔6〕S.152；訳163頁）と述べているが、可能なるものをそのように限定してもなお、筆者の目下のケースについて厳密に数え上げればそれこそ無数の可能性の分岐点があったはずである。

ところで、本来の問題はたんなる「コンティンジェンシー」ではなく、「ダブル・コンティンジェンシー」であった。ルーマンによる「コンティンジェンシー概念の拡張」をふまえたうえで「ダブル・コンティンジェンシー」の問題に立ち戻ろう。本節冒頭にあげた二つの引用文のうち最初のものの出番である。引用文中の「他者は、まだ不明確な状況のなかで、はじめはみずからの行動を試行的に決定する」という部分を筆者の上述の体験にあてはめるなら、著作のほんの一部を読んだという以外ルーマンにかんしてほとんど情報を持ち合わせていない段階が「まだ不明確な状況」に該当する。そうしたなかで筆者は「みずからの行動を試行的に決定」して、とりあえず留学希望を伝える手紙を出したわけである。「賽は投げられた」のであるから、さしあたり「他者（＝筆者）は自分の提示した状況規定を相手である自己（＝ルーマン）が受け入れるのかどうか、どのように受け入れるのかを、じっと見守っている」ほかはない。

一方、全く未知の人物から手紙を受け取ったルーマンにとって、手紙が送られてきたという事実およびその文面は当の人物にかんする情報であり、未知の人物はルーマンとのコミュニケーションにかかわるコンティンジェンシーをあらかじめ縮減した姿で彼の前に現われたことになる。彼はこれに対してポジティブに応じ、基本的に受け入れる用意があるとの返事を出す。そのさい彼自身の経済への目下の関心にふれつつ近作「オートポイエティック・システムとしての社会の経済」の抜き刷りを添えるとともに、かの人物の留学目的の中に経済学そのものの研究が含まれている可能性をも考慮して、隣接する経済学部の研究動向にまで

言及する。

返事が来るのか来ないのか、来るとしていつどんな内容なのか「じっと見守って」いた筆者は、約半月後返事を受け取る。当時の通信事情からすれば予想外に早い応答とその内容は、コミュニケーションにかかわるコンティンジェンシーを一挙に縮減し、筆者のその後の行動を「規定する効果」を十二分に有していた。次の手紙で経済学そのものの研究をするつもりは全くないことを伝え、ルーマン側の「コンティンジェンシー」を縮減したのはいうまでもない（本稿のテーマとは直接関係ないが、このあたりのやりとりは文献〔3〕にも書いた）。

#### Ⅳ-2 コンティンジェンシーとダブル・コンティンジェンシーの区別

ここまで「コンティンジェンシー」と「ダブル・コンティンジェンシー」について筆者の体験を例にとりつつ述べてきたのだが、「コンティンジェンシー」の部分で例示した三つの分岐点に限っていえば、その時点で現にあるあり方（Gegebenes）も「別様である可能性」（mögliches Anderssein）も筆者のコントロールの及ぶところではなかった。言いかえると、筆者とのコミュニケーションが開始される以前にすでに相手が可能性を選択してしまっていた（筆者の来店とは無関係に『社会学的啓蒙第2巻』はすでに書棚に並べられていた！）。同様の事態は自然現象にかかわるコンティンジェンシーではより明瞭になる。「あのとき雨が降らなかったら、彼女と出会うことはなかったであろう」と回想する男にとって、雨が降る降らないはコントロールの範囲外である。これに対して「ダブル・コンティンジェンシー」の部分で示した例は、コミュニケーションの相手にとってのコンティンジェンシーを縮減する努力を当方が行なうことで、相手が当方にとってのコンティンジェンシーを縮減してくれる行動にできる可能性を高める、というものであった。この違いが重要である。すなわち、コンティンジェンシーはそのままでは社会システム（＝コミュニケーションのシステム）の生成にとって妨害物ともなりうるが、ダブル・コンティンジェンシーのかたちをとることによってむしろシステムの生成を助けるのである。ルーマンが「ダブル・コンティンジェンシーによって、…特別の行為システム、すなわち社会システムの分出が可能になる」と言った意味はこれであり、一方パーソンズはおそらくコンティンジェンシー一般とダブル・コンティンジェンシーの間のこの違いに十分な注意を払わなかったと思われる。

コンティンジェンシーはダブル・コンティンジェンシーのかたちをとることによってシステムの生成を助けるというのが本稿の中心命題であるが、まだ説明が完結していない。たまたま命題通りになった筆者のケースをあげただけでは、なんら説明になっていないとの批判もありえよう。そこでもういちど「コンティンジェントなものは、必然的でもなければ、不

可能でもないものである」というルーマンのことばに戻りたい。卑近な例だが宝くじを買うひとは、必ず当たるとはもちろん考えていないであろうが、当たる可能性がないとも考えていないはずである。つまり不可能ではない(=可能性がある)ことに賭けるわけである。もし、当選番号が決まるメカニズムが完全に解明されているなら、宝くじは成り立たない。メカニズムが「偶然」という名のブラック・ボックスになっているからこそ、人びとは宝くじを買うのである。言いかえると宝くじは「分からないから成り立つシステム」なのである。ルーマンの難解な叙述を必死にかきわけて筆者がたどりついたのは、この「分からないから成り立つシステム」という点である。正直に告白するが、*Soziale Systeme* の第3章 *Doppelte Kontingenz* の翻訳を読んでも、原文にあたっても、また村中知子氏や馬場靖雄氏の解説文([7] 143-156頁, [1] 66-83頁)を参照しても、「すっきり理解」とはとても言えず、霧の中に何か漂っているといったありさまである。そして、その何か漂っているものがどうやら「分からないから成り立つシステム」という考え方らしいと、やっと気づいたところである。

#### IV-3 ブラック・ボックスゆえに成り立つシステム

「ダブル・コンティンジェンシーの基本状況とは、要するに二つのブラック・ボックスが、いかなる偶然にもとづくにせよ、互いにかかわりをもつようになることである」([6] S.156. 訳は筆者による)と、ここではじめて「ブラック・ボックス」を登場させたルーマンは、そのブラック・ボックスが互いに相手の内部を明るみに出そうとしても無駄だと強調したうえで、だから「二つのブラック・ボックスは、それぞれ相手についての純然たる想定をとおして相手に関するリアリティの確かさを互いに生み出す」([6] S.156; 訳169頁)ほかないとする。想定が正しいかどうかはさしあたり問題ではなく、互いが想定(や想定 of 想定、想定 of 想定 of 想定等々)にもとづいて自己準拠的に作動することで、ブラック・ボックスたる「二つのシステム〔二当事者〕の間になんらかの創発的な秩序が成立しうるのであり、…この創発的な秩序をわれわれは社会システムと呼ぶ」([6] S.157; 訳169-170頁. [ ]内は引用者の補足)。そして肝心なのは、「ダブル・コンティンジェンシーの状態にある二つのシステムが、互いに相手を見抜くことができ、そして予測することができるということに基づいて、社会システムが構築されるのでもなければ、そのことに社会システムが依拠しているのでもない。社会システムがシステムであるのは、まさしくその基盤の状態についてのいかなる確かさもないからであり、その基底的状态を手がかりとしてはいかなる行動の予想も立てられないからなのである」([6] S.157; 訳170頁)。引用の最後の部分でルーマンは、「ブラック・ボックスである(=分からない)からこそシステムが成り立つ」と主張しているように見える。だがその説明となると筆者の目には錯綜していてよくつかめない。*Soziale*

*Systeme* 第3章第4節あたり (S.166-169; 訳181-184頁) にかじりついてどうにか引っ張り出したところでは、ダブル・コンティンジェンシーは互いに相手の出方次第という自己準拠的循環を意味するが、「この循環は、関与しているシステム〔二当事者〕のいずれ〔の片方〕にも帰しえない新たなまとまりの原基的なかたち」(S.166; 訳181頁.〔〕内は引用者の補足)なのであって、その「新たなまとまり」は社会システムにほかならない、ということらしい。ダブル・コンティンジェンシーはあくまでも原基形式であるから、社会システムになる可能性を秘めているだけで、そこから実際に社会システムが形成されるかどうかは上述の「相手についての想定」などに依存しており、まったく不確かである。しかし逆に、ダブル・コンティンジェンシー状況があるかぎり、社会システムが生まれる可能性が絶えず再生産されているとも言えるのである。ルーマンの言わんとするのはどうやらこういうことらしい。

#### IV-4 最後の一步?

ルーマンの解説に苦心惨憺してようやく少し見通しの良い場所にたどりついたが、霧が全面的に晴れたわけではない。たしかに「ダブル・コンティンジェンシーがあるからこそ、社会システムが生成される」という意表をつく見方のもっともらしさ (Wahrscheinlichkeit) はかなり増した。だが、最後の詰めが残っているのではないか。すなわち、ダブル・コンティンジェンシー状況を社会システムの不成立や崩壊ではなく、その生成・維持へとポジティブな方向に導くものは何かという問いに答えなければならない。ネガティブへではなくポジティブへと舵取る仕掛けがダブル・コンティンジェンシーそのものに備わっているのはじめて、「ダブル・コンティンジェンシーがあるからこそ、社会システムが生成される」と言えるのである。この点にかんしてルーマン自身や他の論者が明確に述べている箇所を筆者は(探索不足かもしれないが)まだ見たことがない。それゆえ以下では、筆者の解答試案(私案)とでもいべきものを示して批判を仰ぎたいと思う。

答のヒントはIV-2でふれた宝くじにある。宝くじは、必ず当たるわけではないが当たる可能性がないわけでもないという意味で、まさにコンティンジェンシーを含んでいるがゆえに成り立つと先に述べたが、より正確に言うと、コンティンジェンシーを含み、かつそのコンティンジェンシーに対してポジティブに反応する者がいてはじめて成り立つのである。必ず当たるわけではない(=必然性の排除)から買わないというネガティブな反応をする者(危険回避者)ばかりではなく、いかに小さいにせよ当たる可能性(=不可能性の排除)に賭ける者(危険愛好者)が相当数いることが必要なのである。世の中から宝くじがなくなるといふ事実は、この必要条件が満たされているしるしである。

宝くじの例から、コンティンジェンシーに対してポジティブに反応する者（危険愛好者）が相当数いることは分かったが、ここから社会システムへと話を一般化するには、もう一段階つけ加えなければならない。宝くじのばあい、断じて買わないという者も少なからずいるはずである。彼らは宝くじというシステムに加わらないままであるが、だからといって彼らが困ることも、宝くじシステムが行き詰まることもない。ところが、今日の社会システムのばあい、システムに加わらない（いかなるかたちでも他者とコミュニケーションを全くしない）人間はほぼ皆無である。いかにしてこのような状態に到達しえたのであろうか。これには次の二つの要因が考えられる。

- (1) 人間はふつう、あらゆるコンティンジェンシー状況に対してつねに同じ反応をするわけではなく、あるときはポジティブ（危険愛好的）に、またあるときはネガティブ（危険回避的）にと反応を変える
- (2) IV-3で示した原基形式からいったん社会システムが生成すると、次第に社会システムへの参加が生存のための不可避の前提条件となる

第一の要因については、各自みずからの行動を振り返ればすぐ思い当たるであろう。ちなみに筆者は宝くじのみならず多くの場面で危険回避的（要するに臆病者）であるが、ところどころで意外に危険愛好的に行動している。どんなコンティンジェンシー状況かによって、またそのときどきの当事者自身の心身の状況によって、反応が一様でないのはむしろ当然である。そうであれば、いかなるダブル・コンティンジェンシー状況においても「相手にかんして想定された可能性」にいつさい賭けることがない、つまり社会システムに全く参加しない人間は例外的となる。これに第二の要因が加わるともはや例外も許されなくなる。第二の要因を説明する格好の事例は経済的分業であろう。自給自足の状態から物資の交換が芽ばえ、やがて交易の拡大とともに分業の体制が確立してくるそのプロセスは、経済的コミュニケーションの進化とみることができ、後戻りのできないプロセスである。今日、地球規模となった分業体制に背を向け、ひとり自給自足の生活を貫徹しうる人間などいるだろうか。コンティンジェンシーないしリスクがあるからといってそのつど取引（＝経済的コミュニケーション）への参加を見合わせていては、生き延びることさえ危うくなる。

幸いというべきか、取引にはたんなるコンティンジェンシーではなくダブル・コンティンジェンシーがつきものである。買い手・売り手とも相手にかんする不十分な情報しかもっていない。すでに別のところで論じたように（〔4〕第8章「市場の非対称」）、直面するコンティンジェンシーの度合いという点では売り手のほうが深刻である。つまり個々の買い手が望み通り売ってもらえる見込みと比べ、個々の売り手が望み通り買ってもらえる見込みのほうがおしなべて小さい。このことは、買い手側から見た売り手のコンティンジェンシーを

売り手側が進んで縮減しようとする誘因となる。先に（IV-2）ふれたように、ダブル・コンティンジェンシー状況ではコミュニケーションの相手にとってのコンティンジェンシーを縮減する努力を当方が行なうことで、相手が当方にとってのコンティンジェンシーを縮減してくれる行動にでる可能性が高まるからである。売り手側のこの努力ゆえに、多くの取引において買い手の直面するコンティンジェンシーは、取引への参加を妨げないレベルに抑えられる。

## V. 結論

ルーマンの叙述を土台にしてダブル・コンティンジェンシーの問題に筆者なりの考察を加えてきたが、全体を振り返ったうえで当面の結論を示しておこう。

「コンティンジェントなものは、必然的でもなければ、不可能でもないものである」と言い表わされるルーマンの「コンティンジェンシー概念の拡張」からスタートすると、さしあたり「必然的でない」ことがコミュニケーション（社会システム）の成立を妨げるかのようである。しかしコンティンジェンシーはダブル・コンティンジェンシーのかたちをとることによって自らを縮減するメカニズムを備えるのである。つい先ほど言及したばかりの「相手にとってのコンティンジェンシーを縮減する努力を当方が行なうことで、相手が当方にとってのコンティンジェンシーを縮減してくれる行動にでる可能性を高める」というのもそのメカニズムの一端であるが、より根本部分をなすのは「互いが分からない（＝ブラック・ボックスである）からこそコミュニケーション（＝社会システム）が生成する」という自己準拠的作動である。「ダブル・コンティンジェンシーの基本状況とは、要するに二つのブラック・ボックスが、いかなる偶然にもとづくにせよ、互いにかかわりをもつようになることであり」、二つのブラック・ボックスはお互い分からない（ブラック）同士なので、とりあえず相手にかんする想定に依拠してコミュニケーションに踏み出すほかはないだろう。これが（筆者が読み取ったかぎりでの）ルーマンの説明である。

では誰がコミュニケーションの第一歩を踏み出すのだろうか。あるいは誰がコンティンジェンシー縮減の努力を最初に始めるのだろうか。ここに上の「必然的でもなければ、不可能でもない」の「不可能でない」のほうが生きてくる。すなわち、「必然的でない」からと断念する人間ばかりでは社会は成り立たないが、「不可能でない」つまり「可能性がある」その可能性に賭ける人間がいるという事実が、社会システム生成の第一歩を保証してくれるのである。II節でふれた「沈黙交易」を例にとろう。ヘロドトスによれば（〔2〕訳〔中〕110頁）、リビア人の住む国に着いたカルタゴ人は海岸に船荷を並べたのち船に引き上げ、合図の狼煙をあげて土地の住民の応答を待つという。売り手の姿の見えない海岸に買い手であ

る住民が現われ、代金の黄金を置いてその場を退く。すると今度は買い手の姿のないその場にカルタゴ人が戻ってきて代金をチェックする。妥当であれば受け取って立ち去り取引は終了するが、不足であれば妥当な額になるまで先の手順が繰り返される。この取引はすでに定着しているものようであるが、さかのぼれば、取引成立の可能性に賭けて最初に積荷を波打ちぎわに並べた（勇気ある）カルタゴ人がいたはずである。そもそもこんな太古の例を持ち出すまでもない。実りの季節に山里を散策していると、道ばたの小屋や台に並べられた野菜や果物を見かけることがある。「代金はこの箱に入れてください」などと表示してあるだけで、売り手の姿はない。買い手ははたして代金を入れてくれるだろうか、箱に投げられたお金を持ち去る不届者はいないだろうかなど、売り手にとって潜在的な取引相手（ブラック・ボックス）にまつわるコンティンジェンシーは小さくない。正当な代金投入は必然的でもないが、ありえないこと（不可能）でもない。その（小さな）可能性に売り手は賭けたのであろう。分からない（ブラックな）相手とのコミュニケーションに踏み出したからには、売り手は相手にかんする想定をしたにちがいない。山里の農家（＝売り手）の想定は都会人のそれより楽観的かもしれない。あるいは、売り手はこの取引に大きな利益を期待していないかもしれない。いやむしろ、都会人をためす実験をしているのかもしれない。いずれにせよ、売り手はダブル・コンティンジェントな状況のもとで、社会システム生成の口火を切ったのである。

「必然的でもなければ、不可能でもない」というコンティンジェンシーの特性と、不可能でないかぎり可能性に賭けるといふ人間に広く認められる特性、この二つがダブル・コンティンジェンシー状況で出会うことによって、社会システム生成の自己準拠的作動が引き起こされる。これが本稿で到達した（さしあたりの）結論である。

#### 参考文献

- [1] 馬場靖雄『ルーマンの社会理論』勁草書房, 2001年.
- [2] ヘロドトス (Herodotos)『歴史』(Historiae)〔松平千秋訳・3分冊〕岩波文庫, 1971-72年.
- [3] Kasuga, J., "Niklas Luhmann aus der Sicht eines japanischen Wirtschaftswissenschaftlers", in: Bardmann, T. M. und D. Baecker (Hrsg.), *Gibt es eigentlich den Berliner Zoo noch?: Erinnerungen an Niklas Luhmann*, Universitätsverlag Konstanz, 1999.
- [4] 春日淳一『貨幣論のルーマン』勁草書房, 2003年.
- [5] 栗本慎一郎『経済人類学』東洋経済新報社, 1979年.
- [6] Luhmann, N., *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp, 1984 (佐藤勉監訳『社会システム理論』〔上・下〕恒星社厚生閣, 1993-95年).
- [7] 村中知子『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣, 1996年.
- [8] Parsons, T., *The Social System*, Free Press, 1951 (佐藤勉訳『社会体系論』青木書店, 1974年).
- [9] Smith, A., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776 (大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』〔5分冊〕岩波文庫, 1959-66年).